

第IV章 まとめ

第1節 土器と石器の分布状況から見られる特徴

縄文早期の遺物包含層中から出土した土器と石器の分布状況を観察してみるとある特徴が見られた。それは、姫島産黒曜石及び安山岩製の石鎚と5類に分類される素材剥片の形状を大きくとどめる石鎚（以下剥片鎚と仮称する）が、D区の西側からA区にかけて分布が集中するという状況である。そこで次に土器の分布状況に注目すると平柄式・塞ノ神式・条痕文土器が同じような分布状況を呈していることがわかった。

このような遺物の分布状況から姫島産黒曜石及び安山岩製の石鎚と剥片鎚は早期後半～終末にかけて特徴的に見られる石鎚として捉えられるという仮説を立てることができる。

そこで過去に報告の行った同台地上の遺跡に注目すると少なくとも3遺跡で同じような様相が確認されている。詳細は各報告書を参照していただきたいが、山田第1遺跡では安山岩製の石鎚と剥片鎚、滑川第2遺跡では姫島産黒曜石製の石鎚と剥片鎚、清武上猪ノ原遺跡第1地区では剥片鎚が早期後半～終末にかけての土器と平面分布が重なる様相が見られている。つまり本遺跡の仮説は過去報告を行った遺跡でも成立しており、船引地区遺跡群では早期後半～終末にかけて、上記の3種類の石鎚が特徴的に見られるということができるだろう。

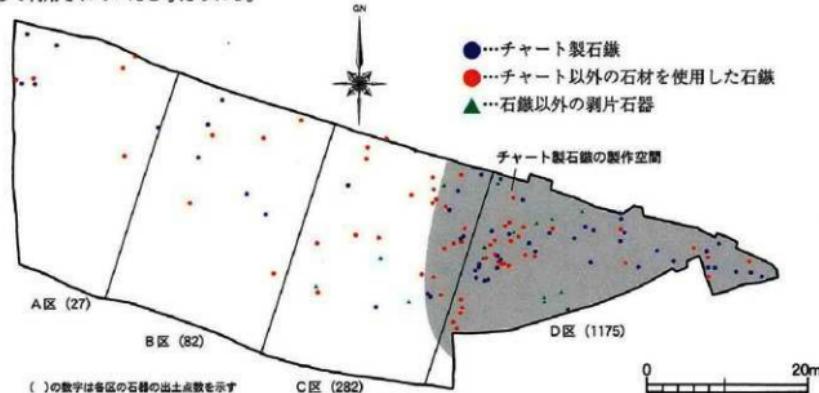
第2節 D区付近の空間利用について（チャート製石鎚の製作空間の想定）

本調査区のA～D区という空間は調査を進めていく上で任意で設定したものである。しかし、遺物包含層中の剥片石器の出土点数に注目するとA区27点659g、B区82点・1809.2g、C区282点・3532.1g、D区1175点・7060.8gとなっている。遺物包含層の削平状況の作用もあるうが、D区における剥片石器の密集度が著しく高いということがわかる（第45図参照）。

このようにD区の剥片石器の出土点数は群を抜いており、その石器の大半はチャート製の剥片・碎片類（794点・1769.1g）である。これらは剥片石器を製作した際に発生したものと考えられ、それらの出土する場所では石器製作が行われていたことを推測させる。

さらにここで何を製作していたのかということを検討してみる。D区に分布している剥片石器の製品類は石鎚（未製品を含む）・尖頭状石器・石錐・スクレイパーである。そのうち石鎚は68点を数え、その他の剥片石器は数点見られるだけである。68点の石鎚の内チャート製のものは41点を数える。D区にみられる剥片・碎片類と同様に石鎚もチャート製のものが多いという傾向が見られる。

このような剥片石器の出土状況や石鎚の使用石材の検討から、D区付近はチャート製の石鎚を製作する空間として利用されていたと考えられる。



第45図 清武上猪ノ原遺跡（第3地区）チャート製石鎚の製作空間想定図 (S=1/600)

第3節 清武上猪ノ原遺跡（第3地区）出土の縄文時代早期前半段階土器群の意義

はじめに 清武上猪ノ原遺跡第3地区では、縄文時代早期の土器として前半段階の無文土器・押型文土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器、後半段階の塞ノ神式土器・条痕文土器が出土している。特に無文土器・押型文土器は、貝殻円筒形土器が主体となる当地域において異系統の土器群といえる。本調査区でこれらの土器群がある程度まとまって出土していることは、縄年の研究に有効であるばかりではなく、当地域における異系統の土器群のあり方を考察するにも有効であると考える。そこで本節では、まず本調査区出土の縄文時代早期前半段階の各土器群について検討し、次にその検討結果を踏まえ本調査区における異系統土器群のあり方とその背景について考察していきたい。

無文土器について 無文土器の出土例は南九州においても近年増加しているが、その縄年の研究はほとんど行なわれていない。縄文時代早期前半段階における南九州はいわゆる貝殻円筒形土器が主体となる時期である。その中において無文土器は出土例が増加しているとはいえ、客観的な存在であることには変わらないであろう。当地域における無文土器の流入は地理的要因から東九州を介したものと推定される。当地域の無文土器の縄年体系が確立していないこと、無文土器は東九州からの影響が考えられることから、本調査区で出土した無文土器について東九州の無文土器の縄年を提示した綿貫後一氏の研究（綿貫1999）を参考に検討していきたい。

まず、時期決定の判断材料となりやすい底部片について検討する。底部片は第22図3の1点のみであった。底部形態はやや丸底ぎみの狭角尖底であり、二日市Ⅲ式土器～陽弓式土器に当たる。SC-3より出土した土器（第19図6）は口縁部から底部付近まである個体だが、その残存状況から丸底もしくは尖底と推定される。次に口縁部片について検討したい。口縁部形態は端部がやや外反するものと直口するものがある。内湾する器形のものがないことから陽弓式より古いことが想定される。とくに端部がやや外反する例は高並垣式土器に類似するものである。最後に調整方法の比率から検討する。本遺跡から出土した無文土器は内外面ともナデ調整のもの（本文中のI類）と外面調整がナデで内面調整が条痕文のもの（本文中のII類）に大別出来る。無文土器は汎化し得なかったものも含めて、計82点出土している。I類が82%（67点）、II類が18%（15点）で、内外面ともナデ調整のものが優位である。本調査区の資料は包含層中出土のものがほとんどで一括りが保障されていないため単純には比較できないが、ナデ調整が優位である状況から二日市Ⅱb式土器以降と推定される。

各属性の検討から本遺跡で出土した無文土器の時期について考えてきたが、ややばらつきがあるため、ある程度の時間幅が存在することが予想される。二日市Ⅱb式土器～陽弓式土器の時間幅の間で考えておきたい。

押型文土器について 南九州に特徴的な押型文土器としていわゆる桑ノ丸式土器の器形に押型文を施すもののが以前から知られている。しかし、近年上杉彰紀氏により南九州における平底円筒形の押型文土器の整理が進められ、別府原式土器や中原V式土器に類似する器形に押型文が施される土器の存在が指摘された（上杉2006）。そのため本文ではまず各系統別に大別することが必要と考え、分類を行なった。

I類は器壁が薄いことや調整方法、文様構成から東九州の押型文土器と類似する一群であろう。Ia類は帶状施文を特徴とするもので川原田式土器⁽¹⁾にあたる。Ib類は外面に横位の押型文を施すもので稻荷山式土器～早水台式土器にあたる。II類は器壁が厚いことや内面調整がミガキを施すものが多いこと、胎土の特徴や口縁部形態から別府原式土器に類似するものと判断できる。また、山形押型文の上に条痕文を施す資料（図22の22）があることからも両者の近縁性が窺える。ところで、これまで知られていた「別府原式土器の器形に押型文が施される土器」はIIb類のように外面に横位の押型文を施す資料がほとんどであった。このことから「別府原式土器の器形に押型文が施される土器」は稻荷山式土器～早水台式土器併行段階と考えられている。しかし、本調査区で帶状施文を施す土器（図22の20）が出土したことにより、「別府原式土器の器形に押型文が施される土器」は一部川原田式土器に遡る可能性がでてきた。川原田式土器と稻荷山式土器を同時期とする見解もあるが（木ノ江1998）、いずれにせよ比較的古い段階から在地の形態の土器に押型文を組み込む手法が出現していたことが指摘できる。さらに、北部九州に目を向けて見ると、福岡県原遺跡に外面に山形文を帯状に施文し、口縁部下に刺突を行なっている資料が存在する。刺突文土器はいわゆる「柏原式土器」の系譜を引くものと考えられている。つまり同じ帯状施文を共通要素とも本調査区の資料（図22の20）と原遺跡の資料の存在から刺突文土器と別府原式土器とは一部併行する時期があることが指摘できる。

この他に注目される資料として帯状に短枝回転文を施す資料（図22の7・8・13・14）が挙げられる。短枝回転文を施す土器は下菅生B式土器以降の時期に宮崎県北部から鹿児島県の一部の地域で確認できると理解

されてきた（柳田2003）。しかし、本調査区で発見された短枝回転文は帯状施文であることから、川原田式土器段階と捉えることができる。したがって、短枝回転文は南九州において押型文土器の比較的古い段階に出現し、押型文期の全時期を通して存在する施文方法であることが理解できる。

以上をまとめると、本調査区で出土した押型文土器は東九州の押型文土器と類似するI類と、別府原式と近縁性があるII類の2系統があり、時期的には川原田式土器と併行するもの（a類）と福荷山式土器～早水台式土器と併行するもの（b類）があることが指摘できる。さらに押型文土器の比較的古い段階から、在地の土器へ押型文を取り入れることや短枝回転文という独自の文様を創出することを行なっており、その受容形態は積極的であったことが窺える。

下剥峯式土器・桑ノ丸式土器について 本調査区では下剥峯式土器が132点、桑ノ丸式土器が1点出土している。下剥峯式土器の編年の研究は近年活発に行なわれており、直前期に位置づけられる石板II式土器との連続性から口縁部文様帯を持つものから持たないものへと変遷していったと考えられている（上杉2005、山下2005）。本調査区の資料は口縁部文様帯を持つもの（本文中のI類）と口縁部文様帯を持たないもの（本文中のII類）両方が存在しており下剥峯式土器の中でも時間幅が考えられる。

ところで、從来下剥峯式土器から桑ノ丸式土器への変遷が想定されていたが、山下大輔氏は器形・文様構成の類似性から両型式が同時期的に並存する同系統（石板式に系譜を辿れる）の土器である可能性を指摘している（山下2005）。筆者もこのように考えたほうが型式学的にスムーズに辿れるため、山下氏の意見に賛成する。しかし、両型式が同時期であるならば本調査区のように一方の型式が卓越する遺跡をどのように捉えるのかが課題となってくる。今後、集団差や地域差、機能差といったものを想定して検討していくことが重要になってくるだろう。

結論（清武上猪ノ原遺跡第3地区における縄文時代早期前半段階の土器の変遷とその背景について） これまで行なってきた各型式の時間的位置付けについての検討結果と綿貫氏の編年案（綿貫1999）、近年の南九州における押型文土器の研究成果（上杉2006、山下・柴畠2007）を参考にすると、本調査区における縄文時代早期前半段階の土器は無文土器から押型文土器（川原田式土器～早水台式土器）、そして下剥峯式土器へと変遷していったことが考えられる。

本調査区では東九州系の無文土器や押型文土器は出土しているものの、これに併行すると考えられる在地の貝殻円筒形土器が出土していない。このことは在地集団と異なる文化要素を持った東九州からの集団が移動してきたことを示唆しているのではなかろうか。さらに、本調査区における無文土器や押型文土器の変遷は東九州の土器変遷と対応していることから、この集団は移動してきてからある程度の期間、東九州からの新しい文化要素の情報を知り得ていたことが予想される。また、貝殻円筒形土器の器形に押型文を施す資料は在地集団との接触を表しているのだろう。下剥峯式土器は、早水台式土器～田村式土器の前半期と併行すると考えられている（上杉2006）。つまり、本調査区においては下剥峯式土器がほぼ単独で存在する時期があったことを指摘することができる。このことから、これまでいた東九州から来た集団は去り、南から下剥峯式土器を携えた集団がこの地へ移動してきたことが想像される。

なお、今回の考察で一部編年的位置付けにも言及しているが、文様構成及び器形や調整から予察を立てたものであり型式学的な検討がなされているとは言いがたい。これに関しては別稿をもって変えさせていただきたいたい。

【註】

（1）本稿でいう「川原田式土器」とは帯状施文の押型文土器を指す。

【引用・参考文献】

- 上杉彰紀 2005 「第Ⅵ・Ⅶ層の調査」『建昌城跡』平成11～15年度発掘調査報告書 紫良町埋蔵文化発掘調査報告書第10集 紫良町教育委員会
- 上杉彰紀 2006 「南九州における縄文時代早期前半の様相」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号 九州縄文時代早期研究会
- 水ノ江和司 1998 「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器－論考編－』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会
- 梅田裕三 2003 「通称「イチゴ」という名の押型文土器」『利根川』24・25 利根川同人
- 山下大輔 2005 「下剥峯式および桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通報』No.16 南九州縄文研究会
- 山下大輔・柴畠光博 2007 「南九州貝殻円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎県における遺構内出土資料の検討から－」『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会
- 綿貫重一 1999 「九州の縄文時代草創期から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集 九州古文化研究会

清武上猪ノ原遺跡（第3地区）における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地区・遺構	種類	前処理・調整	測定法
No 1	第3地区, SI-4	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 2	第3地区, SI-25	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 3	第3地区, SI-28	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 4	第3地区, SI-30	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 5	第3地区, SI-31	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 6	第3地区, SI-45	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 7	第3地区, SI-46	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 8	第3地区, SI-50	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 9	第3地区, SI-53	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 10	第3地区, SI-54	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 11	第3地区, SC-1	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 12	第3地区, SC-3	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 13	第3地区, SG-2	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代(西暦) (1σ : 68%確率, 2σ : 95%確率)
No 1	213801	8860±40	-27.4	8820±40	交点: cal BC 7950 1σ : cal BC 8150~8140, 7970~7810 2σ : cal BC 8180~8040, 8010~7760
No 2	213802	8630±40	-26.4	8610±40	交点: cal BC 7600 1σ : cal BC 7610~7590 2σ : cal BC 7650~7580
No 3	213803	8740±40	-26.4	8720±40	交点: cal BC 7740 1σ : cal BC 7780~7630 2σ : cal BC 7930~7610
No 4	213804	8640±40	-26.2	8620±40	交点: cal BC 7600 1σ : cal BC 7610~7590 2σ : cal BC 7720~7580
No 5	213805	8590±40	-23.9	8610±40	交点: cal BC 7600 1σ : cal BC 7610~7590 2σ : cal BC 7650~7580

No 6	213806	8630±40	-25.9	8620±40	交点: cal BC 7600 1 σ: cal BC 7610~7590 2 σ: cal BC 7720~7580
No 7	213807	8330±40	-26.7	8300±40	交点: cal BC 7340 1 σ: cal BC 7460~7320 2 σ: cal BC 7490~7280, 7230~7190
No 8	213808	8620±50	-25.2	8620±50	交点: cal BC 7600 1 σ: cal BC 7620~7590 2 σ: cal BC 7740~7570
No 9	213809	8670±50	-26.4	8650±50	交点: cal BC 7610 1 σ: cal BC 7720~7600 2 σ: cal BC 7770~7580
No 10	213810	8630±50	-25.1	8630±50	交点: cal BC 7600 1 σ: cal BC 7630~7590 2 σ: cal BC 7750~7580
No 11	213811	3310±40	-26.1	3290±40	交点: cal BC 1530 1 σ: cal BC 1620~1520 2 σ: cal BC 1670~1490
No 12	213812	8870±50	-27.9	8820±50	交点: cal BC 7950 1 σ: cal BC 8160~8130, 7980~7800 2 σ: cal BC 8200~7740
No 13	213813	3340±40	-27.7	3300±40	交点: cal BC 1540 1 σ: cal BC 1620~1520 2 σ: cal BC 1680~1500

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（%）で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

(4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を校正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。

曆年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と校正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.

II. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、第3地区の集石遺構、土坑、道路状遺構から採取された炭化材13点である。これらは、放射性炭素年代測定に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（概目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に、同定根拠となった特徴を記す。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し2本対になる傾向を示す。接線断面：放射組織は単列の同心放射組織型で、仮道管の内壁には2本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在する。

以上の形質より、カヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の濟州島に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弹性強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版2・3・4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお、試料が小片で保存状態が悪く、広範囲の観察が困難なことから、広葉樹の同定にとどめた。

樹皮 bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

以上の形質より、樹皮と考えられるが、樹種の同定には至らなかった。

不明 unknown

木材の形質を呈していない。

5. 所見

第3地区の各遺構から採取された炭化材は、コナラ属コナラ節7点、カヤ1点、コナラ属クヌギ節1点、広葉樹2点、樹皮1点、不明1点と同定された。

最も多いコナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木であり、冷温帯落葉広葉樹林の構成要素であるミズナラやナラガシワ、および温帯に広く生育し二次林の性格を持つコナラなどがある。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地に生育し二次林要素でもある。カヤは温帯を中心に広く分布する針葉樹で、適潤な谷側や谷合いを好む。いずれも、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

表1 清武上猪ノ原遺跡（第3地区）における樹種同定結果

試料名	地 区	遺構	結果（学名／和名）
No 1	第3地区	SI-4	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 2	第3地区	SI-25	broad-leaved tree 広葉樹
No 3	第3地区	SI-28	unknown 不明
No 4	第3地区	SI-30	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 5	第3地区	SI-31	Torreya nucifera Sieb. et Zucc. カヤ
No 6	第3地区	SI-45	bark 樹皮
No 7	第3地区	SI-46	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 8	第3地区	SI-50	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 9	第3地区	SI-53	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 10	第3地区	SI-54	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 11	第3地区	SC-1	broad-leaved tree 広葉樹
No 12	第3地区	SC-3	Quercus sect. Prinus コナラ属コナラ節
No 13	第3地区	SG-2	Quercus sect. Aegilops コナラ属クヌギ節

調査抄録

フリガナ	キヨタケミイハル				
書名	清武上猪ノ原遺跡 - 3 -				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第25集				
編集者名	井田篤・秋成雅博・今村結記				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2008年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間
清武上猪ノ原 - 3 -	清武町大字船引 字上猪ノ原	清武町:205	31° 51' 57"	131° 22' 21"	02.11.21～ 03.09.19
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
2,000m ²	農業関連	集落	縄文 (早期) 中世	集石造構 陥し穴状造構 土坑	縄文式土器 石器 など
特記事項					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第25集

清武上猪ノ原遺跡

-3-

県営農地保全整備事業給引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成20年3月31日

編集発行 清武町教育委員会

〒885-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字給引1204

TEL 0985-85-1111

印 刷 田中印刷有限会社

〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地

TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285

